

聖賢

徳川家康

続 蕭風城の巻・戦争と平和の巻



山岡莊八 講談社

徳川家康 第十六卷 続蕭風城の

巻 戦争と平和の巻 昭和四十一年

四月三十日第二刷発行 著者 山

岡莊八 発行者 野間省一 印刷

所 凸版印刷株式会社 製本所

大製株式会社 発行所 株式会社

社講談社 東京都文京区音羽町三

ノ一九 振替 東京三九三〇 電

話 東京(九四二)一一一一(大代表)

©山岡莊八 一九六六

定価 六百二十円

徳川家康

16

統蕭風城の巻
戦争と平和の巻

目次

統蕭風城の巻

戦国遺品

七

激流の杭

二三

女使者

四〇

柱石砕く

六六

入城軍略

八六

友情三略

一〇一

老いの決断

一二

流浪の星

一二四

戦争と平和の巻

老虎と鷹

一三六

千姫地獄

一四八

神崎川の先陣

一六四

親子鷹

一七九

動揺

一九五

女性陣

二二三

伊達の薄氷

二三七

理想と情勢

二五一

今生の試練

二六七

夢魔

二八八

修羅の春

二九九

汗の悪霊

三一〇

大愚の執念

三二五

庶民の眼

三四一

前夜の決断

三五二

一触即発

三六七

付録（参考地図及諸家系譜）

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染

提供 山口 勉

表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

16

続
蕭風城の巻

戦
争と平和の巻

続蕭風城の巻

戦国遺品

一

都では大仏殿の開眼供養を、何時か「太閤さまの十七回忌——」と、呼びならしていた。

この八月十八日が、その十七回忌にあたるから……ということよりも、七回忌の豊国祭の盛大さを想い起こしての、市民の期待を含んだ呼び方だった。

七回忌の豊国祭すらあれほど盛大だったのだ。こんどの十七回忌は、その何倍かの規模の大祭典になるであらう……と。

いや、その期待の底に、実は一つの大きな不安が秘んでいたのだが、それは、大梵鐘が出来上がるころになると却って下火になっていた。

一時大騒動を匂わした切支丹問題が、この頃には、市民の記憶から遠ざかりかけていたからであろう。

大久保相模守忠隣がやって来て、諸所の会堂をこわし、改宗をせまったり、それを聞き入れなんだ者を捕縛したりする頃には、今にも天下に大乱が起こりそうな気がして怖れたものであった。

それがその後何事もなく納まり、大鐘楼の建築もおわって、問題の大梵鐘がそのそばに運び出されて来たからだった。

この工事の警固のために、大坂方から派遣されて来ている武士の数は三千人あまり……

それ等の人々は運び出された大梵鐘を、見せるがごとく、見せてはならないもののごとく……一目見ようとして集まって来る群衆を、彼等は、叱りつけたり、近づけたりした。

大仏殿の広大さ。金銅仏の堂々たる巨軀、それに、ついに東大寺の鐘に劣らぬほどの大梵鐘が加わるのだ……

この金銅仏はその後寛文二年（一六六二）にまた地震があつて倒壊したので、時の幕府はこの大仏を鑄つぶし、寛

文通宝という錢に鑄替えて民間の便に供したのだから、或いは工事のどこかに手落ちがあったのかも知れなかったが、梵鐘の方は、昭和の世までその威容を残している。何故に徳川家を呪詛したと称する問題の梵鐘が、その後ずっと鑄つぶされずに残されたか……？ その辺に深い意味が含まれているのだが、それは後のこと……

とにかくこの大梵鐘の高さは一丈四尺（約四・二メートル）口径は九尺二寸（約二・八メートル）もあって、その重量は一万七千貫（約六十四トン）というのだから、十七回忌を待ちかねて、京の市民がこれを見ようとするのも当然だった。

中には人夫に何ほどかのお賽錢を握らせて近づいて見て来たかと自慢する者が出たりするほど評判になっていた。

その新造の鐘を、所司代の板倉勝重は、眼を赤くして工事を急がせた片桐且元に案内されて見に来た。

随行したのは本阿弥光悦と、茶屋の内儀の於みつだけで、むろん表立った検分などではない。

この時すでに勝重は、この鐘が、これからどのような難題を打ち出す鐘になるかを知っていた。

彼は、且元が、真新しい菰こもを解いて、清韓長老の撰した鐘銘の文字を見せた時に、あわてて顔をそむけるようにして、

「――なるほど、立派なものじゃのう」

と、本阿弥光悦の方に眼をそらして同意を強いていた。

そして、所司代屋敷に帰り着くまで、ひどく気むずかしげな表情で、殆んど口を利かなかった。

二

本阿弥光悦は、これも、すでに事態を察していた。

京・大坂の人口は日々増加して、所司代の行き届いた手当て物価だけは暴騰をおさえられているものの、今の町家では呑み切れないほどの人口にふくれあがっている。

大抵の寺院には、講中、信徒などの他に、得体の知れない牢人者が泊まりこんでゴロゴロしていた。

このありさまは大坂において最もひどく、堺もそれに劣らなかった。

「三十万人は入りこんでいますなあ」

所司代屋敷へ帰りついて、勝重の居間にとおると、光悦は近ごろかわりだした、後の宗匠頭巾に似た帽子をとって額の汗を拭いた。

その光悦に、於みつは、黙って内ぶところから小さな帳面を取り出して渡した。

たぶん何かの調査を、光悦は、茶屋に頼んであったのに違いない。

板倉勝重は、それをチラリと横目で見やって、これも黙って汗を拭きだした。

「なるほど……」

小帳面をくりながら、光悦は、誰にともなく、

「大体上方に入りこんでいる牢人の数は十六、七万人……そのうち、分銅吹きわけの黄金で諸用を賄うもの、七分三分の割りと見えますなあ」

板倉勝重は頷くでもなく、頷かぬでもない様子でタバコ盆を引き寄せた。

「坂崎出羽のようなものがあるからの」

「それは、万一戦になったおり、徳川方へ仕官の途をすめようという者で」

「それが三割……という、翁の見方は少し甘い」

勝重は、わざとらしく吐息して、

「わしは八分二分と見る」

光悦は生まじめに首を振った。

「人間はもう少し眼先の見える、そろばん上手……負けるとわかってる方には、案外味方せぬもので」

「そうではない」

と、勝重はさえぎった。

「翁の見方は甘い！ 人間はの、案外身の程知らぬ賭け好きのものじゃ。取分が多い……と思うだけ、ワーツと無分

別に動くものじゃ」

そういうながら、こんどは小さな紙片を取り出して光悦に渡した。

光悦はそれを黙って於みつと二人の間にひろげた。

「見せる……といわずに見せてゆく氣らしいが、勝重はそれをとかめようとはしなかった。

その紙片の最初には「真田左衛門佐幸村」と書いてあり、その上に「五十万石——」と記してあった。

次には「長曾我部盛親」「後藤又兵衛」「塙団右衛門」「毛利勝永」などの名が並んでいる。

そして、長曾我部の上には「土佐一国——」と書いてあり、後藤の上には「三十万石」、塙の上には「二十万石」と書いてある。

本阿弥光悦は唇をゆがめて首を振った。

「真田がせいぜい十万石、あとは、一万石でも多いご仁のようで」

勝重はそれには応えず、

「武将の中には、尾張のうつけで終わるか、天下を奪るか……そう呼号して戦った総見公以来の賭け根性が深く根をおろしている。いわばこれは、総見公の遺品での。翁は、そうは思わぬかの……」

三

本阿弥光悦は、きびしい表情でうなずいた。

「われ等も、かねがねそう考えて居りました。死んだ信長公が、生きている大御所に牙をむいて対決を迫っている……笑いごとではない。槍先で掠め取れとか、刀で斬り取れとか申して、多くの武將たちに、領土も民草も財宝も榮譽も、みな腕力に任せて強盗するものだと思ひ込ませたのは、信長公でございました」

「その事よ」

板倉勝重は、光悦と於みつの間にひろげられた書きつけを扇の尖で指しながら、

「その習慣が未だに残って、このように、五十万石だの、三十万石、二十万石などという、誘いの餌の評価になる、これだと物騒きわまる乱暴者ほど出世してゆくことになるのだが、誰もそれに不審を持たない」

「いいえ、それに不審を抱いて、泰平の世の人造りに乗り出されたのが大御所でございます。それゆえ、われ等は、死んだ信長公が、生きておわす大御所の敵になったと申したので」

「なるほど……」

勝重はこんどは深くうなずいた。

「そうか。信長公の時代の戦国氣質が、泰平の世になってみると、大敵に変わっていったというわけか……人間の考え方というものは、いったんその身にしみつく、ぬきさしならないものになるからの」

「御意……この光悦は、信長公の時代の斬り盗り第一の考え方の、最も大きな犠牲者は実は、亡くなられた太閤さまであつた……と、近ごろになって気がつきました」

「なに、豊太閤が、最大の犠牲者だと……?」

「はい。太閤さまは、信長公から、斬り盗りしか習わなんだ。それだけ教えられて、その道の名人になられた。そして、日本国の統一という信長公の目的は達成されたのだが、さて、そのあとのことは何にも教えられていなかった……そこで一ツ覚えの侵略の手を、こんどは高麗から大明国へ伸べようとして、あのような大失敗をなされてお鉢をこわされた。これは太閤さまの罪ではなくて、信長公の教えに、斬り盗りの侵略しか無かったところに原因があつたのだと気がつきました」

「なるほど、翁の思案は、やはり深いわ」

「いいえ、今迄気付かなかったのは、性来愚かだったからでございます。口では偉そうなことを申して居りましたが、新しいものも又、つねに古くなる……という、たったそれだけのことに気付かなかったのに他なりません」

「新しいものも又古くなるか……」

「はい。日に新しく、日に進む……同じ所へは寸時も止まらないのが、天地の姿のようでござります」

「フーム」

近ごろ、いよいよ感心癖のひどくなった勝重は、ひとしきり首を傾げて感心してから、

「すると、こんどの開眼供養じゃが、これをここで停止させると、先ず、まっ先に吹き出す風は何であらうかの？」

「その儀について、ようやくこの光悦に、いささか見通しがつきましてござりまする」

「そうか。それを承ろう。どうじゃな、騒ぎの起こらぬよう速戦即決の手段は無からうかの？」

「そういふと、光悦は、明らかな嘲笑を唇辺にうかべてはげしく首を振ってみせた。」

四

「速戦即決は、採らぬと申されるか」

板倉勝重はおどろいて訊き返した。

本阿弥光悦は、うなずきながらいよいよ皮肉な笑顔を深めて、

「これは、信長公の亡霊と大御所さまの合戦でござりまする。速戦即決では、信長公が勝ちましょう」

「ほう……これはおもしろいことをいわっしゃる。なるほど、これは斬り盗り第一の信長公と、泰平万々歳の大御所の戦……に違いないわ」

「されば、先ず開眼供養の中止をお命じなされて、それからしばらくは気永に間をおきまする」

「なるほど……」

「すると大坂方に軍備を整える隙を与える……と、考えるのが、世のつねの知恵でござりましょう。しかし、この光悦は、そうは思いませんぬ」

光悦は、またまじめ過ぎるほど生まじめな平素の顔に返って声を秘めた。

「先ず中止を命じておいて間をおきますると、勢いかられて大坂入城を志して来た者どもも、ちよっとイキを抜かれて考え直します……考え直せばしめたもので、決して入城者の数が殖えることはござりますまい。いったいこの戦、何れが勝つか、と考える時を与える……これが大切な戦略ともなり仁愛の心に通ずる労りともなりましょう」

板倉勝重は呼吸をつめたうわ目で、じっと光悦の額のあたりを見詰めている。

「私は、豊家への恩顧や義理に殉じようとして集まっている者どもは砂中の金ほどと見えています。恐らくその大半は全く違った胸算用……切支丹のためとか、おのが出世のた

「フレーム」

板倉勝重は、はじめて小さく膝を叩いた。

「なるほど、思案というのは、あるものでござるの」

「わかった！」

と、勝重は声をはずませた。

五

それまで黙って二人の会話に耳を傾けていた於みつが、はじめて口を挟んで来た。

「大坂では、もはや戦は避け得ない……そう察して、秘かに立ち退き先を探している富商がたとございます」

「そうであろうなあ。まだ全く戦火の災禍を忘れ去っては居るまいから」

勝重が合槌を打つと、於みつは、又思いがけないことをいった。

「ところが、それは大坂方の計略……そういいふらす者もごいます」

「なに、大坂方の計略だと……？」

「はい。まず城の近くや要所々々の船着場などは危からうが、堺まではどちらも焼きはすまいというので、堺へ隠宅

を設ける者が多くなりました。ところがそうさせておいて、大坂方は、堺の津を押えるのだと申す者がございます」

「ほう……そうすれば、どんな利得があるというのじゃ」

「はい……堺の津を押えておかねば、イスパニヤやポルトガルから援軍がやって来たおり上陸しにくい事になる。いや、それよりも富商たちをあそこへ集めておいて、これに軍費を出させる気なのだ……」

本阿弥光悦は淡い顔になって、

「それはみな、為めにする流言、耳を藉^かさぬが宜しゅうござる」

「という、戦にせず済ます手だては……私は、やはり千姫さまや、ご母公さまがお痛わしいのでござりまする」

そういわれると、光悦にも勝重にもいうべき言葉はなくなった。

千姫や淀の方だけではあるまい。於みつとはかくわが腹を痛めた姫と、その父親の秀頼を城に残して来ているのだ……

むろん今は茶屋の新造だったが、しかし、心の底には拭いきれない傷あとが残っているのに違いない。

「私は、何時もおじさまに、正直に申し上げて来たのです。戦にならぬ……そのための働きならばどのようなことも致しとうございます。しかし、戦と決まってゆけば、身

をひいて、じっと一人で祈るより他にないのでございます」

「それは、ようわかって居る」

と、光悦はたしなめた。

「それゆえ、こうして、板倉さまの前まで伴うて参っているのじゃ。今はまだ戦と決まったわけではない。相手の出方次第での……戦と決まってゆけば、わしもこなたを連れ

ては歩かぬ……」

「でも……」

と、於みつは、ちょっと甘えた様子で首を傾げて、
「ここまで来ている開眼供養をどうしてお止めなさるのでござりまする？」

「さあ、それは……」

光悦は狼狽して勝重の方へ視線を泳がせた。しかし勝重は何も答えなかった。

というのは、彼自身も必ず中止させるであろうとはわかっていても、何を理由に罷^よりならぬといって来るかは、まだ、全く手さぐりの状態だったのだ……

(大御所が、どんな知恵を出されるか?)

信じてはいたが、これは相当苦しいことになろうと思っている。

いわば中止の命令は、戦開開始の鎗矢ではなくて、秀頼

母子への反省の謎になるべきものという、想像は出来るからであった。

六

「これはの、誰にもわかることではない。が、そなたは、何でそのようなことが、心にかかるのじゃ」

光悦は、勝重が於みつに向かつて何も答えようとしないので、そういわずに居られなくなって来た。

「さあ、それは……」

「こなたによう知っておいて貰いたいのは、とにかく開眼供養は中止になる。そしてそのあとで、戦になるかも知れぬ、ということだけじゃ」

「は……はい」

「戦になれば、茶屋の留守を預かるこなた、何彼と考えておかねばならぬ事がある筈……それ以上のことは、誰にもわかることではない」

すると、於みつは又何かいいかけて、ふっと黙った。その様子は、如何にも気にかかることがあり、それを思い悩むふうにも見える。

「於みつどの、こなた、まだ何か、考えていることがありそうなの」

「はい……いいえ……」

「今更、わし達に隠すことも無からう。あるのならばいうてみさっしやい。出来る出来ぬは別にして、胸にあることをいってしまふと、気の済むものじゃ人間は」

「はい……でも……」

「聞いてやろう。そして、忘れよというのならば、聞かぬことにして忘れてやろう」

「では……申し上げます。実は、戦になったとして、そのおり、わらわに、助けてあげたいお方が一人ござりまする」

「それは、そなたの腹をいためたお方……と、違つかの」

「いいえ、そのお方には、私の手は届きませぬ。もう一人のお方ござりまする」

「何に、もう一人のお方とは……？」

「はい。もう一人、右大臣秀頼さまのお血筋に国松君さまというお方がござりまする」

「おお、そのお方のことか」

「はい……このお方は、千姫さまをはばかり、京極家ゆかりの者の手に預けられて居ります。それが近くご城内へ呼び寄せられるとか……呼び寄せられては、これも私の手は届きませぬ。出来ることならば、このお方、そっと助けてあげたいのが、私の希ねがいござりまする」

いってしまつて、於みつは怖おそえたように勝重の顔いろを